

常滑市民俗資料館

友の会だより

第15号



窯窯発掘風景 昭和59年（1984）常滑市久米にて（記事P 1 ご参照）

15/10

平成6年3月発行(1994)

窑 窯 考 (あながま)

片 山 忠 義

縄文、弥生、埴輪等土器という素焼のやきものしか知らなかった日本に5世紀初め(古墳時代)かたく焼き締った須恵器が朝鮮半島の技術者集団によって伝えられた。須恵器とは粘土をロクロで成形し山の斜面にトンネルを掘った窑窯(アナガマ)で高温で焼いたもので大阪堺市の陶邑窯スエムラウヨがそれである。

5世紀末に豊田市の猿投山麓にも須恵器を焼く窯が出現した。朝鮮半島から直接渡来したか、陶邑から陶工達に移って来たのか不明であるが、祭祀用具等いろいろ焼いて居る(猿投山西南麓古窯跡群)7世紀には名古屋市東部の丘陵地帯に拡散し約千基の窯跡がある。

11世紀には猿投や東山から知多半島北部に伝わり、山茶碗や山皿を焼いたのが「知多古窯」の初まりである。

平安末から室町中期の間、知多半島一帯には約3,000基を越える窯跡があったと推定され、これらの窯は焼く品物や場所、時代によってそれぞれ異なり燃焼室(ほくぼ)から焼成室の間

の床を低くしたり、土堤を(20cm~30cm)を築いたり、又分焰柱が壺本だけでなく数本並べたのやいろいろ改良を加えて経済的効果をあげる工夫の跡が見られる。

こんにち猶、半島のどこかで発掘が行われており、この作業にいつも参加して熱心に研究と観察をつづけ、その体験をベースに窑窯を築き、「古常滑」の再現を試みた陶芸家のグループが居る。

その話によれば、先づ窯に適した地質、即ち硅砂と粘土が程良く混在する丘陵を選定、その頂上附近でその内部構造が左右相対で狂いのない様にトンネルを掘ること、之はかなり熟達した技術が必要である。

窯の構造は燃焼室(ほくぼ、どうぎま)と焼成室の体積比、及び斜度(25~30度)も設計上の重要なポイントであり、窯焚きの技術が燃料の消費量や製品の歩止まりにも影響する事が判明した。

窯の温度も二昼夜で容易に1,300度まであげる事が出来たが大量の燃料を必要とした。

製品の歩止まりは予想以上に良好である事が判った。これは今迄多くの窯跡を観察して最も理想的と思われる窯の形態を作る事が出来た結果と思考される。これは貴重な体験である。

半島の地域によって焼く品物も異なり北部や南部では、山茶碗や山皿を焼く比較的小型の窯、また中央部(知多市、常滑市、半田市、武豊町)は大型の甕(直径70~80cm)を焼く窯が多い。中世の知多半島の植物分布が変わったといわれて居るが、これは知多古窯の最盛期を迎えて昔から自生していた雑木や照



窑 窯 作 品 展 平 成 5 年 11 月

葉樹を大量に消費してそのあとに成長の早い松や杉に替ったものと思われる。

13世紀（鎌倉末期）には猿投、東山や渥美窯等山茶碗、山皿の窯が粘土の質の良い瀬戸や美濃の製品に圧迫されて姿を消し、室町期になると知多の北部や南部の窯が消滅し、甕や大壺を焼く中部の窯のみが常滑の海岸に近い場所にの

み僅かに残ったのである。

これは枯渇した燃料の買入や製品の積出の便宜の爲である。

そして此の頃漸く燃費も製品の歩止まりも悪いトンネルを掘った窑窯からより経済的な半地上式の大窯となり、ここに窑窯の終焉をむかえるに至った。

大野村浜島伝右衛門のこと

河 合 謙 吉

浜島伝右衛門家は古見の出身で、大野村へ移住してから木綿商売を始め、天明年間、知多郡木綿買継問屋となり成功した豪商であります。又、代々信仰心が厚く各寺社へ寄進されたものは数多くあります。ところが、このことが余り世間に知られておりません。そこで、大野周辺に残されている浜島家の足跡について、御紹介したいと思います。

なお、浜島家の系譜については、瀧田英二氏の「常滑史話索隠」に委しく述べられていますので、これを御参照いただければ幸いです。

1 齊年寺の経堂

大野町の齊年寺の山門をくぐると、右側に一字の経堂が建っています。立札に「享保三年（1718）四月浜島五兵衛なる者一切経黄檗版全部同人の寄進」とあります。

浜島家当主は、歴代五兵衛を名乗って来ましたが、五世直利の代に伝右衛門と改め、以後十一世まで伝右衛門を襲名しています。経堂の寄進者は、五世直利と思われます。

浜島家の菩提寺は、この齊年寺です。同寺の墓地に浜島家の墓石が、同家の歴史を物語るかのように、沢山並んでいます。

2 大野十王堂の慈恩王像

大野町の町角に、十王堂が優美な姿を見せて建っています。この堂には、人々が死んで



齊年寺経堂（常滑市大野町）

から、その生前の罪業を、七日ごと、百ヶ日、一年、三年と調べる十人の冥府の王がおまつりしてあります。十人の王は、当時の大野周辺の有力者達によって寄進されたものですが、その中の慈恩王像は、浜島伝右衛門によるものであります。十王堂は、何回か火災にあっていますが、現在の十王像は、寛保元年（1741）に寄進されたものと思われます。

3 西之口神明社の文庫

西之口神明社は、昔、外宮と呼ばれ、大野の内宮御祭宮社とともに由緒ある神社です。

宝暦三年（1753）浜島伝右衛門は、独力で神明社へ文庫を建立寄進し、蔵書も多数寄附しました。又、文庫田として田畑を寄附し、その作米をもって文庫の修繕、虫干、入用に当てることにしました。文庫とは蔵書の保管

を主要な目的とする図書館のことで。

4 矢田の薬師堂の絵馬

矢田の薬師堂は、寛文年間（1661-73）以前に建立された堂で、本尊は薬師如来です。この堂に数枚の絵馬が奉納されていますが、その中に三人の唐人を描いた絵馬があり「安永七年（1778）施主大野浜島氏延春」と記されています。延春は八世浜島伝右衛門のことです。この絵馬は、常滑市文化財に指定されています。

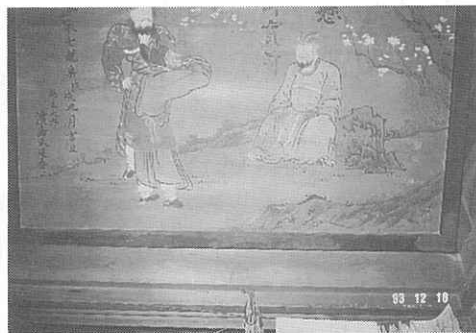
5 小倉神社の絵

名鉄電車大野町駅の北方に小倉神社があります。この神社に、浜島伝右衛門が奉納した大きな絵が二枚あります。画面は板で、それに見事な牡丹が描いてあります。浜島伝右衛門の名は明らかですが、何世か不明です。画家は源素と読めます。画面にかなり剥脱の部分があり、相当古いものと思われます。

6 浜島家の住居

浜島家の住居は、記録によれば、大野橋詰町とあり、大野の中心地帯にありました。古図によれば、大変広大なものであります。現在、浜島邸はM氏の所有になっており、県道拡幅などで、昔のままではありませんが、なおその面影を失っておりません。入口の土間は、優に百人はは入れる広さがあり、そこか

ら家屋内の通路は石畳となっています。昔そこを荷を積んだ車が通り、太い大黒柱に車軸が当たって削られた傷跡が、今も残っています。石畳は、五ツの土蔵の前まで続いています。いくつかの茶室・庭なども、その名残りをとどめています。



安永7年（1778）寄贈の矢田 信谷院薬師堂の絵馬
（常滑市文化財）

結び

江戸時代の大野村からは、庄屋の平野彦右衛門、廻船惣庄屋の中村権右衛門、綿屋の平野六兵衛、保命酒の江戸屋木下仁右衛門など、傑出した人物が輩出しました。本稿の浜島伝右衛門もまた、その一人です。

今後とも、更に調査を進め、その業績などを明らかにしたいと思っています。

（注）この小文は主に「大野町史」「常滑史話 索隠」の記述に従い作成しました。

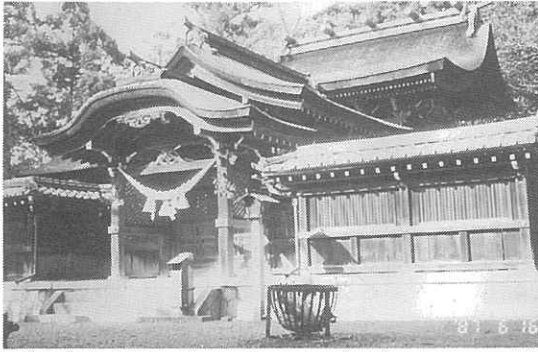
棟札にみる苧屋村の宮大工について

岩 田 裕

私達の住むこの街・苧屋の歴史は、文書や遺物或いは古老の話などに依ってある程度知ることが出来ると思われます。さらに地方文書などを手にして、鎮守の杜に入り、寺院の境内に佇み史跡の碑文を読むとき、それがさほど古くさかのぼるものでなくとも、なにかしら過去の歴史と対話したような気がすることは、豈筆者のみな

らず、大方諸賢の皆様方も同じかと思われます。

郷土の歴史を調べるにあたって、この村には昔から大工職に就く者が多く、里言葉に「草木（阿久比）左官か苧屋大工か」とまで言われていたことを想起し、編集者の奨めに従い、苧屋村の宮大工に関する資料にあたってみました。



多賀神社（常滑市苅屋）

常滑市教育委員会編の「常滑市域の神社棟札調査」を紐解いたところ、多賀神社、白山神社（松原）、熊野神社（熊野）、八幡神社（大谷）、白山神社（小鈴谷）、広石神社（広目）の最初の棟札から、苅屋の大工の名前が確認され、その家系は職は変われど現に、苅屋地区に存在して居ります。まことに過去の歴史が身近に感じられるものです。

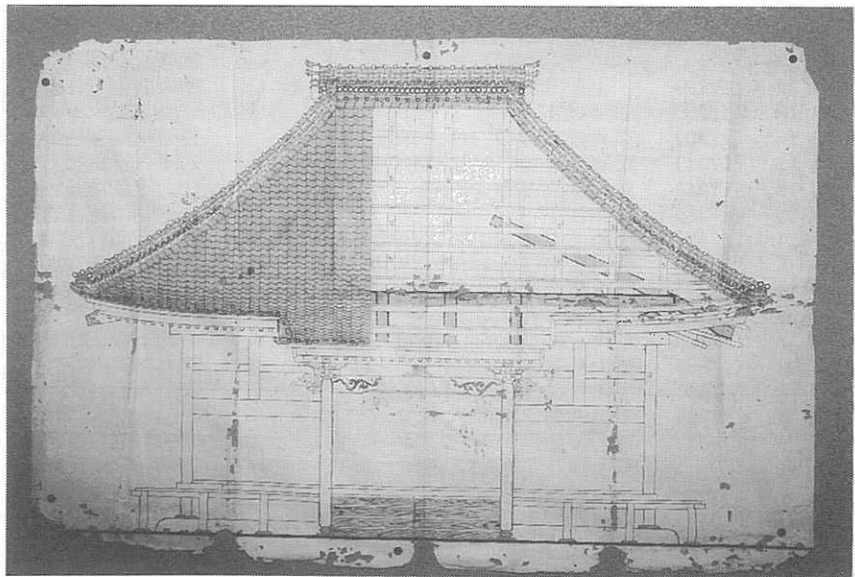
寺院建築については「張州雑誌」及び堂の天井裏にある棟札を確認したものであり、これを年代別に順記すると表のようになりました。

江戸時代の苅屋には数系統の宮大工が存在し、その活動は西沢豆志庄域に広く及んでいることが判明しました。隣村では地元の大工と共同で仕事をしたことが、その記名から知られ

ますが、苅屋からの大工の派遣は、技術指導という性格が強かったのではと推測されます。

いずれにせよ西沢豆志庄内にその足跡を残された当地の宮大工が工匠としての技術を親から子へ、親方から弟子へと受け継ぎ、他村には見られぬほどの土地柄を生み出してきたことができます。

そのうちの一つ守山佐右エ門家については、古い墨書の工匠秘伝の巻、お寺正面、側面図等が多く伝わり、近代明治大正期に入り洋式木造小屋組の修得を物語る資料もあります。学校校舎、役場庁舎、隔離病舎、織布工場等の図面が残されて居ます。近代に入り大きな建築に大勢の大工が従事したことが偲ばれ、これは往時の宮大工技術が活かされていたものと推測されます。こうした変遷によって、今日この地区に大工職の多いという地域色が生まれたのではなからうかと思われま



設計図の一部

大永 7年 (1527)	奉造立再興御社一宇藤原三所大権現	藤原民六郎工門	苅屋
天文 7 (1538)	奉再興御社一宇藤原三所大権現	藤原左工門五郎	〃
〃 10 (1541)	奉高松宮社一宇	左工門五郎重家	熊野
天正 5 (1577)	奉再講棟上信心大施主	平重家	松原
慶長 4 (1599)	奉再興棟上信心大施主	六郎左工門重家	〃
〃 6 (1601)	奉勸請當郷氏子寿命長 延命富貴	平朝臣藤原六郎左工門	大谷

慶長 10	(1605)	奉再興東宮一字	六郎左工門	熊野
元和 2	(1616)	奉再興御社一字藤原三所大権現	左工門五郎	荻屋
〃	(〃)	奉再興白山社一字	左工門五郎	桧原
〃	(1619)	奉再興新熊野一字	平朝臣重家左工門	熊野
〃	(1621)	奉新建立多賀大明神社一字	左工門五郎	荻屋
寛永 2	(1625)	奉再建立諏訪大明神靈社一字	平朝臣重家	大谷
〃	(1635)	奉建立再興御社一字藤原三所大権現	藤原左工門五郎重次	荻屋
〃	(1636)	奉新建立白山社一字	藤原朝臣左工門五郎重次	桧原
〃	(〃)	奉再建立白山妙理大権現一字	〃	〃
〃	(1641)	奉再建神明一社	左傳次	大谷
明歴 3	(1657)	奉再興西社宮一字一乘山広目寺鎮守	平朝臣盛山左傳次重満	広目
万治 元	(1658)	奉建立再興御社一字藤原三所大権現	〃	荻屋
〃	(1660)	奉再建立白山社一字	〃	桧原
〃	(1661)	奉再建立権現一社	平朝臣盛山佐右工門五郎	熊野
〃	(〃)	〃 東宮一社	〃	〃
〃	(〃)	〃 西宮一社	〃	〃
寛文 2	(1662)	奉再上葺仕神明一社	平朝臣盛山左傳次重満	大谷
〃	(1663)	奉建立拜殿一字	平朝臣盛山佐右工門五良	荻屋
〃	(1667)	再興白山妙理大権現	平朝臣盛山佐右工門五郎重満	小鈴谷
延宝 3	(1675)	奉再上葺仕神明一社	盛山左傳次重政	大谷
貞享 元	(1684)	奉 白山妙理大権現	平朝臣盛山佐右工門五郎重満	小鈴谷
〃	(1685)	奉再建藤原三所大権現	〃	荻屋
〃	(1686)	奉再建中一社	〃	熊野
〃	(〃)	奉再建立西一社	〃	〃
〃	(〃)	奉再建立東一社	〃	〃
元禄 6	(1693)	奉上葺多賀大明神一字	守山左傳次	荻屋
〃	(1696)	奉再堂建立神明一社	平朝臣守山左傳次	大谷
〃	(1698)	奉再興熊野三社午頭天王両社宮一字	平朝臣守山左傳次重清、傳次郎	広目
〃	(1699)	奉建立熊野権現三社鳥居処	左傳次重次	熊野
〃	(1700)	奉再興白山妙理大権現	盛山左傳次	小鈴谷
宝氷 5	(1708)	奉上葺白山宮一社	左傳次	桧原
〃	(1709)	奉再興熊野三社午頭天王両社宮一社	平朝臣守山左傳次郎重久	広目
〃	(〃)	奉建立新熊野社	守山左傳重次	熊野
正徳 3	(1713)	奉再建立白山妙理大権現	平朝臣守山左傳次郎重久	小鈴谷
〃	(1714)	奉再造立藤原三所大権現一字	藤原氏左傳次	荻屋
享保 4	(1719)	奉上葺熊野権現午頭天王両宮一社	藤原朝臣守山伊左右工門重久	広目
〃	(1728)	奉建立客殿一字	守山定助	安楽寺
〃	(1730)	奉再建立藤原三所大権現一字	藤原朝臣守山定助重長	荻屋
〃	(1731)	奉建立熊野三社大権現鳥居	荻屋村定助	熊野
〃	(1734)	奉再建立多賀大明神一字	守山定助重永	荻屋
〃	(1735)	観音堂再建	藤原朝臣盛山佐衛門五郎満次	端泉寺
延享 4	(1747)	奉再造立藤原三所大権現一字	藤原朝臣守山定助重長	荻屋
宝歴 5	(1754)	奉再葺替白山妙理大権現	守山左傳次重長	小鈴谷
明和 4	(1767)	奉上葺藤原大権現	守山左傳次	荻屋
〃	(1770)	奉上葺多賀大明神一字	〃	〃
安永 2	(1773)	奉再上柿葺替白山妙理大権現宮	平朝臣守山定助茂長	小鈴谷
天明 3	(1783)	奉上葺藤原大権現	守山左傳次	荻屋
〃	(1788)	奉再葺替白山妙理大権現	守山六郎左工門真盈	小鈴谷
寛政 3	(1791)	奉再建葺上藤原大権現	守山六郎左工門、守山左右工門	荻屋
享和 3	(1803)	奉上葺遷宮多賀大明神	守山六郎左工門真盈	〃
〃	(〃)	奉上葺迂宮藤原大権現	〃	〃
〃	(〃)	奉再葺替白山大権現	守山六郎左工門	小鈴谷
文化 7	(1810)	奉上葺補修迂宮藤原大権現	〃	荻屋
〃	(〃)	〃 多賀大明神	〃	〃
〃	(1812)	奉葺替修復	守山六郎左工門真盈、岩田定八	〃
文政 2	(1819)	奉建立高欄	岩田定八、守山左右工門、種吉	〃
〃	(1823)	奉上葺遷宮藤原大権現	〃	〃
〃	(〃)	〃 多賀大明神	〃	〃
天保 10	(1839)	奉本堂一字再建	守山左右工門正則、岩田定八	安楽寺
〃	(1841)	奉上葺迂宮藤原三所大権現一字	守山左右工門、岩田定八	荻屋
〃	(〃)	〃 多賀大明神	〃	〃
安政 3	(1857)	奉上葺迂宮多賀大明神	〃	〃

現在、荻屋地区では有志が集い、守山家の古記録などをもとに、かつての荻屋を語る会を開いている。

フランス人ビゴアの描いた半田陸海軍大演習(二)

桑原道雄

半田での陸軍大演習は、国の威信をかけたものであり、国の内外に喧伝したデモンストレーションであった。その目的とするところは (1) せまり来る戦争準備であり (2) 条約改正を意図した国際交流の場としての夜会であり (3) 近代化日本を喧伝—富国強兵による天皇の軍隊を知らしめるものである。おおざっぱに私はこう考えるのです。

明治20年代、日本をとりまく国際情勢、国際環境は緊迫したものがあつた。すでにトラブルが絶えなかつた朝鮮は日本の安定確保の為明治政府の課題であつた。朝鮮は日本にとって、利益線、生命線であつた。

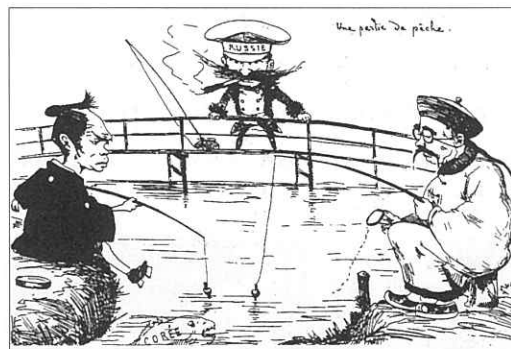
列強のアジア侵略の動きにあわせて、日本の大陸進出は不断の関心事であつた。明治日本の眼は早くから、大陸に向かつていたのである。もっぱら大陸作戦の準備であり、戦争を推進する中心である大本営を設置している。明治20年、つまり半田陸海軍大演習の3年前半田とは目と鼻の先の武豊で時の総理伊藤博文を迎え天覧の陸海軍対抗大演習があつた事蹟は武豊町役場にある東郷平八郎書の「鳳翔閣」の石碑が物語る。

明治26年には字都宮に大本営が設置され、陸軍大演習が行われた。

明治天皇行在所には大本営がおかれた。半田では小栗富次郎家であり、名古屋では東本願寺別院であつた。大本営とは、天皇に直属する最高の戦争指導機関であり、平時は存在しない。参謀総長有栖川宮熾仁親王のもとに一旦緩急ある場合は臨戦体制に即応できるものとみてよい。それほどまでに極東アジアは風雲急なるものがあり、文字通り一触即発の危機にさらされていたのである。

フランス人画家ビゴア (1860-1927) の傑作諷刺画をみればそれが理解できるはずである。

ビゴアは明治日本の目撃者である。日本の政局と日本人を辛辣に諷刺した。今日、私たちは中学社会科の歴史教科書にビゴアのイラストをふんだんに目にすることができる。その中でどの教科書でも共通しているのが「漁夫の利」(原題は「魚釣り遊び」) で明治20年2月15日横浜外人居留地を発信基地にして発行された「とばえ」に掲載された。



「漁夫の利」佛人ビゴア画(横浜開港資料館所蔵)

明治10年代後半から20年代にかけて、日本と清国は朝鮮の権益をめぐる対立を続けていた。そんな状況を諷刺したのがこのイラストである。

小国朝鮮を釣りあげようとしている日本と清国、そして、スキがあれば虎視眈々と狙っているロシアの関係を描いたものである。日清戦争へいたる朝鮮をめぐる日本、中国、ロシア、それはやがて、日露戦争の導火線となるのです。

幕末に幕府が諸外国と締結した、修好通商条約は日本にとってきわめて不平等な条約であつた。そのため条約改正が明治政府にとって大きな課題であり、自由民権運動の要求するところとなった。歴代外相はこれを撤廃させるため血のにじむような苦勞をした。外国人と対等に交

際できてこそ条約改正ができると信じた明治政府当局は、舞踏会を立派に行うことが義務だったのです。

外国使節との交流の場として、鹿鳴館を考えた。外交使節をもてなし、鹿鳴館に象徴される欧化主義が出現した。内外の高官や上流社会の人たちの社交場として、毎夜くりひろげられる夜会や舞踏会は、酒のみ、ダンスに興じて、深夜まで乱痴気騒ぎを展開したという。

伊藤博文の主催した仮装舞踏会には、当時の愛知県令と共に常滑に来たことのある井上馨が杉内蔵頭と鳥帽子、素袍姿で知る万才のコンビで出演している。ちなみに山県有朋は奇兵隊長に、渡辺帝大総長は歌人西行に仮装している。

外国使臣の歓心を得るつもりだった欧化政策はビゴーがいみじくも猿真似、滑稽と批判したこともあるように、軽佻浮薄として取り沙汰されることが多かった。



天覧大演習記念碑（知立市来迎寺公園）

鹿鳴館外交の延長とみてよい明治23年4月3日の名古屋東本願寺別院での夜会には鹿鳴館で顔なじみの外国公使や、国内高官もいたはずである。東本願寺別院で舞踏会もあったという識者もいるが、それを立証する資料はない。

戦災で東本願寺は焼失したが、ダンスをする余ゆうがあったかどうか、第一パートナーをそろえることができたか疑問である。

横浜開港資料館所蔵のイラスト

このビゴーのイラストは友の会だより先号と同様1890年の9月13日発行の週刊絵入り新聞「ル・モンド・イリュストレ」に掲載された一枚である。タイトルは名古屋でおこなわれた天覧大演習 Nagoya sur le champ de manoeuvres représentantants étrangers とある。

このイラストを最初みたとき、永年写真をやる者にとってこれはかなり臨場感のあるスナップ的スケッチだと思った。

目の前に弁髪^{ベンバツ}の清の要人や、朝鮮で上流層の人が着用する山高帽子の公使が目につき、まわりには大礼服の武官や文官がおり、向うの馬上には駐在武官、文官が大観兵式を見守っている。2000人を動員して、拡張された師団練兵場において、第3、4両師団、近衛二旅団、水兵三大隊、合計4万人の兵を集めた。

さて、外国からの使節、駐在外交官はどここの国か、つまり条約改正を必要とする国を知りたかった。明治23年4月2日、半田方面から三河方面での大演習が続く、三河では牛橋村や猿渡川において激戦があった。今日、知立市来迎寺公園に有栖川宮熾仁親王書の石碑と共に、刈谷池田八郎謹撰並書なる石碑に明治天皇と共に大演習を陪観した諸外国名が連なる。

特命全権公使は仏（フランス）白（ベルギー）独（ドイツ）魯（ロシア）奥（オーストリア）洪（ハンガリー）米（アメリカ）臨時代理公使は葡（ポルトガル）阿（オランダ）瑞（スウェーデン）諾（ノルウェー）丁（デンマーク）それに韓国。駐在武官として将校は普（プロシヤ）仏（フランス）英（イギリス）であり、清国からは現職の欽差大臣が参席している。

当日、八事山において東西両軍の将校を会して、明治天皇（大元帥陛下）の審判、熾仁親王の公評もあり、外国使節も同席した。同夜は外国使節が宿舎にしていた名古屋栄町の秋琴楼に

おいて川上少将が接伴委員長になって立食パーティーが行われた。ここへ各親王殿下、各大臣、将官と共に夜会を催したことが東京朝日新聞が報じている。

翌4月3日夜は観兵式が行われた第3師団から南約1キロはなれた東別院で夜会が開かれたことは前にも記した。

まるで夜会に合わせるかのように明治22年12月名古屋に電灯がともった。東別院の門内は数えきれない球灯を点じ、紅白のちょうちんを二段にかかげ、幔幕をはり、2000燭光以上の電灯を東西に点じ満堂を照らしたという。

明治天皇をはじめ、各国大使、文武諸官、全国の知事、議長、判事、検事、実業家、それに注目したいのは海防費献金者なる人まで招かれて、総勢2100余名が参会したという。鹿鳴館以来の一大饗宴は夜を徹して酔いしれた。参会者のうち外国人は13名出席したという新聞報道があり、演習を陪観した公使達とみてよい。

明治維新。それは一等国をめざす開発途上国でもある日本が、国家として独立を達成する立国の時代でもあった。

おそるべきスピードで日本の近代化の道は西洋の模倣からはじまった。文明開化とは先ず、日本が国際社会の中で欧米列強諸国と肩を並べていくために、明治政府が強力に推し進めた日本社会の欧化政策にほかならなかった。

富国強兵のスローガンのもとに軍隊が創設さ



名古屋での天覧大演習／佛人ビゴー画
(横浜開港資料館所蔵)

れた。陸軍はフランスから、海軍はイギリスを手本とした。この為の指導教育はお雇い外国人によるものだった。大演習で武豊沖に集結した日本の連合艦隊で主力艦は高千穂、扶桑など艦名はあるがほとんどイギリスからの輸入品である。

陸海軍の大演習とはいえ、軍事機密や、国家機密に関係することである。駐在使節を招き陪観させることは、我が身をみすかされていることでもあり、秋琴楼(明治24年の濃尾地震で倒壊)における軍楽隊伴奏による名古屋芸妓のふるまいなど、おもねる態度が気になるところである。すべては欧米なみの近代化日本を見せ、条約改正交渉を促進するための手段であったのであろうか。まだまだ疑問が残るところである。

明治政府が治外法権撤廃、関税自主権を得るにはこれから10年の月日を待たなければならなかった。

人生の矛盾 岩川芳郎

定めなき世には若きは頼みあり、兎にも角にも老の身ぞ憂き
兎に角も老は多くの年を経つ、定めなき世に若き身ぞ憂き
もとよりの飯の世なれば借もよし、夢の世なれば寝るもまたよし
もとよりの飯の世なれば借りにくし、夢の世なればどさうは寝られず
なかなか山の奥こそ住よけれ、草木は人の上をいはねば

なかなか山の奥こそ住うけれ、草木は人の上をいはねば
味噌こしの底に溜れる大晦日、こすにこされずこされずにこす
味噌こしの底に溜らぬ大晦日、することなしてこころよくこす
明日ありと思ふ心にひかされて、今日も空しく入相の鐘

(遠い昔の本から)

かつての“いちき橋” 界限（一）

渡 邊 榮 造

トコナベノイチキバシ、常滑のいちき橋と一人の子供が目を押えて早口に、10遍唱えている間に、あちこちの物蔭に走り込むハナ垂れ小僧達、寒い北風が吹荒ぶそのいちき橋上では、いま隠れんぼの最中らしい、ときは昭和初年の真冬のひと時である。



竣工式で大賑いのいちき橋付近(大正11年2月)

このいちき橋は、大正8年(1919)常滑の“いやけ”(現常滑市北条二丁目付近)から瀬木の口田(現栄町七丁目)を経て、山方橋方面への郡道新設工事の一環として、^{モロガタニ}師ヶ谷(現栄町五丁目)の山をくり抜くようにして架けられた高さ約10m、長さ19.3m、巾4.4mの陸橋である。

とき恰かも欧州大戦(第一次世界大戦)が終り、未曾有の大戦景気は沈静化し、その反動で米騒動などがあったとはいえ、常滑の焼物生産は戦前の3割も増えるなど、好況の余慶を受けて、小学校(常滑西小学校)に壮大な講堂を新築するのと相俟って、この郡道の着工は地域の発展に一段の加速が期待できる工事だったと思われる。

かくして大正10年10月(1921)竣工、翌11年2月、奥条の伊奈長三郎家、北条の小嶋梅太郎家、保示の福田萬三郎家の、それぞれ三夫婦が晴れやかな渡り初めをして目出度く竣工を祝った。しかし、そんな目出度い渡り初めの陰には、大規模工事にえてして起る人身事故がこの工事にもあったらしく、犠牲者の家族が激しく泣い

ていたと古老から聞いたことがあった。

橋の上に立つと北は狐塚の山(現原松町四丁目)の向う遙かに、多屋のお宮の森までよく見えるし、南は小学校(現常滑西小学校)の大きな講堂の向うに、天沢院の大きな墓がくっきり望め、林立する煙突の煙に遮ぎられながらも、眺めは最高に良かった。

すぐ目の下を通る郡道は、北条の往還(町通り)と違い、道巾が4間半(約8m)と断然広く、いちき橋界限の人々は、誰もが“しんみち”と呼んでいて、私は幼ない頃広い道はみんな“しんみち”と言うものと思ったものである。

いちき橋は又中々近代的で、橋の下面に電燈が埋め込まれ、夜は下の新道を明るく照らしていた。たゞ橋の上を鉄輪の荷車や牛車がよく通る為、その震動で電球が度々切れ、初めの内はその都度橋の上を開いて電球を取替えていたようだったが、やがていつの間にか切れたまま放置されることになる。

さて大寒に入って連日小雪がちらつくようになると、悪童共も滅多に姿を見せなくなる。そんな寒い晩に限って夜中に火事があった。いちき橋西詰の火の見櫓の半鐘でびっくりしてとび起きると、家の人達の後を追って寝巻のまま橋の上へ走って行くと、南西の方角、光明寺の森の上が真っ赤に染っている。火元は何処かの登り窯だという。

物凄い火炎の怖さと寒さに震えながら見ていると、その内に上天池の端(現常滑市陶磁器会館)にある消防ポンプ小屋から、消防(団員)がポンプを引き出して、橋の下をガラガラ引張って走り出す、デコボコの砂利道を鉄輪の重い消防ポンプを引いて、この寒い夜中に大人は大変なことだと、子供心にも思ったものである。

瀬木の歴史聞き書き・寺院について

八木卓久

相持院（新四国六十五番札所）

古く（明治10年頃以前）は現在の神明社の南にあって、六百余坪の広さの土地に本堂をはじめ、庫裡、観音堂、弘法堂が建ちならび、寺小屋としても機能していた。明治維新の廃仏毀釈によって、寺の運営が困難となり、明治10年（1877）廃寺となって、同じ瀬木地内の宝全寺に統合された。その跡地は小学校となり、後に旧陶器学校となり陶器関係の子弟の教育に大きな貢献をし、またその後は常滑幼稚園となっていた。

現在の相持院の前身、西光寺は明治36年（1903）静岡県川崎町から西光寺の寺号を譲り受け、土理の毛の地に開寺（現在の阿弥陀堂）し、新四国六十五番札所を移したのが始まりで、一年後には北屋敷九十九に移転した。この早い移転は瀬木の街の発展を期待してのことだった。その後、寺号が相持院に改称された。

昭和22～24年（1947～1949）に神明社前の道路拡幅のため、北屋敷から現在の相持院のところへ移った。この地は以前山の神のあったところである。移転当初の堂は、天沢院の地藏堂か或は弘法堂が、いまの墓地のあるあたりに建てられていた。その後大野の東竜寺の塔頭が売りに出されたのを二十五万円から三十五万円程で譲り受け、現在のところに建立された。さらにその後も山門、鐘楼なども整えられて現在の姿となっている。

当寺は曹洞宗で天沢院の系列の寺であった。

宝全寺（新四国六十四番札所）

この寺は慶長年間よりあまり変っていない。慶長5年（1600）に瀬木にあった天沢院は九鬼の軍に焼かれたりしたが、その当ても宝全寺は難にあっていない。そのためか、この寺には多

くの仏たちがまつられている。仏さんのデパートと云われている程である。新四国六十五番札所も西光寺に移されるまでは此处にあった。旧相持院の観音堂が境内に現存する。毎年八月十五日には古い十三仏の掛軸が開被されるが、これは後述する元十王堂にあった什物である。

境内には「ナンジャモンジャ」と云う名で知られる〈ひとつばたご〉の立派な木がある。

この寺も曹洞宗、天沢院の系列の寺である。



瀬木土理ノ毛の阿弥陀堂

阿弥陀堂

瀬木地区の口田交差点の東、三彩園さんのところから田中会計さんの前の坂を登って行くと左手にお堂がある。おあみだと言われている無住の堂である。

何年か前までは堂守が居住していた。いまでも信者の人達がよく集っておられる。

ここは明治36年（1903）西光寺が開寺されたところであるが、前述のように西光寺は明治37年（1904）北屋敷に移転している。阿弥陀堂の前庭は広くはないが、西南に眺望が開け旧常滑の街が一望出来る場所である。

ここではおたん仏と言われる行事が、毎年三月に開催されいまでも続いている。

また、竹腰三信公ゆかりの弘法大師像の掛軸



親鸞聖人御旧跡碑
(常滑市保示 眞福寺境内)

が現存している。この掛軸は、三信公が高野山で修行されたとき持ち帰られたものを、まわり

弘法へ寄進され、それが後にこの阿弥陀堂へおさめられた。明治37年（1904）に七回目の表装をし直した記録がある。

親鸞聖人御舊跡の碑と十王堂

この碑は現在保示の眞福寺の本堂の向かって右側に移されて立っているが、以前は瀬木北屋敷の現在の日高歯科医院さん附近に十王堂があり、そこに立てられていた。

高さ1m57cm、幅24.5cmの石碑で、表面には「親鸞聖人御舊跡」とあり裏面には「文化八年辛未歳春二月之建」とある。

十王堂は横二間、長二間半の萱葺であったという記録がある。

(以上は平成5年6月13日の郷土史部会において、山田勇さんがお話しされたことを記録したもので、すでに郷土史部会の方にコピーを配布したもので、再録であることをおことわりしておきます。)

公園などの人物像について

桑 山 亀 義

私の住んでいる地域には、石造りなどの人物像はどんなものがあるか調べてみました。次の4体の像を発見することができました。

- (1) 二宮金次郎立像（陶製）
高さ 80cm 台座 130cm
三和東幼稚園内（旧三和東小学校）
- (2) 二宮金次郎立像（石造）
高さ 87cm 台座 43cm
三和西保育園内（旧三和西小学校）
- (3) 二宮金次郎立像（石造）
高さ 125cm 台座 52cm
大野小学校内
- (4) 佐治与九郎座像（コンクリート造）
高さ 74cm 台座 32cm
城山公園内の佐治神社
三和東幼稚園の金次郎陶製像には、

「水玉作」の刻字があり、台座の前面に「勤儉、裏に「初老記念 皆川薩次郎 芳山志賀一 村上徳重 皆川喜式 村上正一 村上 茂 皆川



二宮金次郎像、向って
右陶像 三和東幼稚園
左石像 三和西幼稚園
保育園

武一 皆川辨二郎 富田保平 村川定一 皆川
作治 芳山重吉 富田常雄 村上万之助 昭和
14年2月」の石板があります。

「常滑市学校教育100年誌」(昭和48年刊)の三
和村立第二小学校の沿革に、「昭14・3二宮金
次郎の銅像竣工(昭18・3供出して陶像とかわ
る。陶像は現在も残っている)」とあり、銅像
の写真が掲載されている。

三和西保育園の金次郎は、三和西小学校第3
回卒業生が、卒業記念として6年生担任の竹内
重盛教諭の推せんで、昭和26年3月に建てられ
たものです。その当時は、小学校の玄関横の松
の木のそばにあったが、その後、保育園となっ
て、鉄筋コンクリート造の園舎に建て替るとき
に(昭和49年)、園庭の南西の角に移されたよ
うである。(現在地)

大野小学校の金次郎は、台座に「昭和10年池
野長次郎 寄贈」と刻まれている。建立時は、
大野尋常高等小学校(現在の大野海水浴場駐車
場)の南校舎北の中庭に建てられた。



二宮金次郎像(石像)
大野小学校(正門)

昭和22年新学制により大野町立大野小学校と
改称され、その後昭和29年市制施行により常滑
市立大野小学校となって、昭和35年大野小学校
と三和西小学校が統合し、現在地(大野中学校
跡)に開校となる。金次郎像は、昭和37年4月

4日に正門の所へ移されたものである。

城山公園の佐治神社の佐治与九郎像は、平野
仙之助著「海の城」によれば、佐治神社・大野
城跡保存会の発会式が、昭和39年7月14日に催
されて、この記念行事として公園東入口に鳥居
と大野城跡の碑とともに神社の塀の中に佐治与
九郎像を建立したとある。さらに作者は、知多
市古見の竹内政幸氏が製作したとある。

○陶製の金次郎像作者「水玉」について調べて
みる。水玉は、水上文吾の号名である。文吾
は、明治17年(1884)3月16日常滑町水上茂
八の長男に生まれた。同30年常滑工業補習学
校に入り彫塑の技を修めた。同38年東京深川
の下澤與吉に就いて更に其技を習得し、同40
年備前国和気郡伊部村の大饗梅三郎に雇われ
て置物等の製作に従事し、技術大いに進み、
帰郷後専ら美術彫刻品、肖像及び玩具製作な
どに従事した。同42年常滑陶器学校卒業生よ
りなる陶友会設立に際して、その会長に推さ
れ、多年に会員の一致共同と斯業発達、及び
母校の向上発展等に尽力し、町会議員、及び
陶器工業組合専任理事のほか、各方面に活躍
した。性格温厚着実な有力者である。(「尾
張瀬・常滑陶瓷誌」(昭和12年刊)より)、昭
和32年(1957)11月に73才で亡くなっている。

栄町6丁目鯉江俊三氏宅には、文吾71才の
作(昭和29年夏、水玉作)、達磨大師像(35cm)
がある。

○大野小学校の金次郎像寄贈者池野長次郎氏に
ついて調べてみる。

長次郎氏の孫が、知多市新舞子駅前で売店
(池野商店)を営んでいることを聞き訪ねる。

長次郎氏は、明治4年(1871)犬山池の村
の神主の家に生まれる。若い頃は、入鹿池の
番人などをし、薬つくりの方法を身につけ大
野町へ引越し(引越年不明)、クスリと写真

の池の薬館を開店す(現在の犬野町3丁目130、鈴木米屋の所)(看板多数あり、一部をエーザイヤクスリ博物館へ寄付)、その後、犬野町まで愛知電鉄(現名鉄常滑線)が開通(明治45年(1871)2月18日)頃に、新舞子駅西前(当時は西側に駅舎)に移って、みやげもの店を始める。(当時は1軒しかなかったのでよく繁昌す。)石造物に興味をもち、灯ろう、狛犬、金次郎などを買い集め、各所に寄付した。

金次郎の寄贈は、還歴祝と孫の入学(将来)であって、小倉神社(犬野駅前)と日長神社にも狛犬を寄付している。昭和12年(1937)5月22日66才で亡くなっている。

- コンクリート造り佐治与九郎像の作者竹内政幸氏について調べてみる。

政幸氏の息子が知多市古見駅西(旧古見旅館)に住んでいると聞き訪ねる。

政幸氏は、明治30年(1897)10月1日農家に生まれる。半田農業学校を卒業してから名古屋で商売す、別荘(現在地)を管理し戦後古見旅館を経営、警察官になったり、八幡町役場に勤務後、町会議員(2期)や民生委員・調停委員を歴任、手指が器用で趣味として、

竹細工、木彫刻などし、最後はコンクリート彫刻に熱中し、大黒様づくりを得意とした。知多市新知 福生寺には大黒様、恵比須様、観音像、知多市大草の地藏寺には弘法大師立像、知多市古見の古見熙邦塚には親王座像などがある。昭和63年(1988)4月2日、92才で亡くなっている。



佐治与九郎像(コンクリート像)城山公園

秋の見学会・紅葉の伊勢路に 鋳物のルーツと伊勢型紙を学ぶ

肥田花子

穏やかな晩秋の11月17日。四日市から伊勢路へかけて資料館友の会は秋の見学旅行を挙げる。参加者51名、賑やかに市役所を出発した。

行く程に窓外は秋色を増し、田園風景が目を楽しめます。稲刈りを終えた田は、ひこばえが伸びたち、畑は秋野菜が豊かに稔って、つい先頃までの異様な野菜不足は嘘のよう。流れもゆるやかな木曾三川を渡って、やがて菰野に着いた。

先ず菰野資料館へ。

資料館へ入った途端、目についたのが、ぼろぼろと朽ちた丸木舟。河川を修復した時に出土したとあるが、古代日本にも丸木舟が既にあったとは驚いた。奥へ進むと、檜の木作りの大きな水車があり、機織り用具一式据えられて、里人達の暮らしの名残りをとどめている。が、何んと言ってもこの見ものは、一米余もある吊

鐘。緑青がいっぱい浮いて壮重そのもの。お話によれば、伊勢の鋳物師の歴史は、天正の頃に遡る。松阪の蛸路より出て津や桑名、田光に住みついた鋳物師が、慶長19年、京都の方広寺に納められた大梵鐘を作った折りにも参加している。

かの梵鐘は徳川家康が豊家を取り潰す口実にした事で有名だ。その他、銅の灯籠、茶の湯の釜など優れた作品が残されている。

ここでは当時の鍛冶法を再現したミニ作業場が設置され、鑪やこしき、たたらなど用いた鍛冶法の工程をつぶさに説明して頂く。

次の民俗品収蔵庫へ向うまでの窓外の森の緑は素晴らしく、この辺りに、先頃皇太子御夫妻が育樹祭に来られ、昭和天皇お手植の樹木の枝打ちをされたとか。果てしなく続く県民の森の緑の景は、鈴鹿国定公園地帯で、この風光明媚な森の一隅にひっそりと収蔵庫が建っている。

中はさして広くないが棚に陳列されている骨つぼは、常滑と瀬戸のもの。館長さんの説明によれば、遺跡盗掘者が検挙されたのがきっかけだったとかで、大々的に掘り出した時は、輪塔一基につぼが一つ出て来たが、多くは篠根がびこり砕けて、完全な形を保ったのが常滑焼が十数個、瀬戸焼は三十個足らずあり。大切に保管されている。思いがけず常滑焼をここに見、一同感無量。ほっとため息を洩らす。

〽遠き祖の手の跡見せて並びる

菰野の里のとこなべの壺 尚子

〽訪れし菰野の里にはからずも

わがとこなべの古陶器に遊ぶ 早知子

近江などへの交通の便もあり文化産業の発展を遂げて来た。ここは石材の産地でもある。森の緑や、手入れの届いた茶畑に眼を休ませ椿大



鈴鹿伝統産業会館前にて

社に向う。

到着した椿大社の会館でゆったり歓談しながらの昼食はお腹も空き頃とあって、その美味しかった事。きれいに平げ疲れも取れて足取り軽く椿大社にお参りを済ませます。

猿田彦様を主神とするこの宮の由緒は、神代に遡る程の歴史があり、仁徳天皇の御代、御霊夢により椿の字を以って社名とし、現在に至る。全国二千余社の、猿田彦神社の大本宮との事道祖の神として御利益あらたかなそう。

〽玉砂利を踏みて詣づる椿大社

老杉暗く神韻ただよふ 美代子

僅かな時間でもお参り出来て、幸な気持ちで次の見学地へ、バスは軽快に走る。伊勢平野は茶でも知られ、きれいに刈り込んだ茶畑の縦が何処までも続き、また苗木畑も至る所に青く育っている。この風物詩の眺めは飽きずつくづく旅の楽しみを噛みしめる。

〽行きゆけど唯青々とすじ引きて

茶畑続く伊勢の旅路は 花子

鈴鹿伝統産業会館は伊勢名産の墨と伊勢型紙の資料をビデオでその出来上るまでの工程を見せて展示品と共に私共に知識を与えてくれる。

まず菜種油、椿油、ごま油などを燃やしすを取る。

にかわの煮汁や香料を入れて団子状にし、丹念に足で踏んで練る。それを型に入れて万力にかけて固め、取り出した墨は鉋で形をととのえ、草木灰の入った箱の中で日をかけて乾かす。再び天井から吊るし、何ヶ月も乾燥させ、仕上げは貝殻で磨き色づけして完成。こうして色艶香りの三拍子揃った墨が生まれる。一方伊勢型紙も墨に勝る手仕事で、型地紙を作る工程だけでも大変な技術を要する。上質な美濃和紙をはり合せ、柿渋を塗り強い地紙ひとつ作るのに幾手間もかける。その型紙に細かい精緻を込めた模様を彫る技術は長い修業の年月を重ねて、な

お気の許せぬもので、何十本の彫刻刀を柄に合わせて使う息の詰まる仕事で少しの心の乱れも許されない。こうして出来上がった巧緻な模様の型紙が、日本の着物の美を産みだす、感動の極み。

〽指先の動きに神経凝らしつつ

伊勢型紙の小紋彫らるる 美代子

今回もまた中味の濃い見学に参加出来、無事に帰る事が出来たのも、係の方のお骨折りと運転手さんの安全運転に心より感謝して家路につく。

皆さんお疲れ様でした。

当会役員（常滑市文化財審議委員）村田正雄殿 御逝去

当会役員村田正雄殿には、かねて病気療養中の処、薬石効無く昨年12月31日、78歳をもって逝去されました。同氏は当会発足以来終始熱心にお力添えを載き、当会の発展に格別のご尽力を賜りましたことを、衷心より感謝申しあげると共に、ここに謹んでご冥福をお祈り申しあげます。

編集後記

今年の冬は例年にない大雪に見舞われ、ちょっと驚かされましたが、奈良のお水取りも済むと、さすがに日一日と春めいてまいりました。

当友の会だよりも、皆さんのご協力により、ようやくこゝに第15号の発刊にこぎつけることができましたことは、ご同慶に堪えない次第であります。今回は特に片山さんの畜窯考、河合さんの大野村浜島伝右衛門のこと、岩田さんの棟札にみる刈屋村の宮大工について、桑原さんのフランス人ビゴーの描いた半田陸海軍大演習（二）、八木さんの瀬木の歴史聞き書、桑山さんの公園の人物像等々大変バラエティーのある紙面になりましたことを、大変嬉ばしく思っております。

つきましては、本号をひとつの節目として、従来の12頁から今回に限り16頁に増頁いたしましたので、ご諒承下さるようお願いいたします。

なお、今後共益々奮ってご寄稿賜りますようお願い申し上げます。

次に来る4月24日(日)は、平成6年度の当会総会を開催いたしますので、萬障繰合せご出席下さいますようお願い申し上げます。

また当日は総会修了後、久方ぶりに当会顧問山田陶山氏の“恩師を偲ぶ”と題した記念講演がありますので、是非ご聴講下さい。

さて、本日から4月30日(土)まで、“我が家の歴史展 Part 8 井上楊南画業展”を開催いたします。井上楊南翁は初め医学を学びながら絵画に深く興味を持ち、更にまた陶芸の道にも入って、大正14年(1925)、パリ万国装飾美術工芸博覧会で、万国博名誉賞を受賞されるなど大きな足跡を残された方です。

お知り合いの皆さんお誘い合わせて、多数ご来観下さいますようお願いいたします。(編集・渡邊)

第15号、平成6年(1994)3月25日発行、発行所 常滑市民俗資料館友の会、常滑市瀬木町4-203
電話〈0569〉34-5290 編集担当者 渡邊 榮造 印刷 株式会社 好文